

進路指導室から 第266号

はじめに

はや、2月も下旬です。日に日に日没の時間が遅くなっています。春の到来もあと少しかと思うと、何となく気持ちが明るくなります。ただし、新型コロナウイルスの感染が国内外で拡大していることが気になります。このところ、イベント等の中止や延期が発表されていますが、25日（火）から、高校生の進路決定に大きな意味をもつ、国公立大学の前期日程試験が行われます。大学側からその対応策について発表されていますが、受験生に影響がないことをただ願うばかりです。

さて、ここ数年の私の業務の柱は、教科指導、進路指導、クラブ指導の3つです。一見、関連性がないようですが、すべてを大事にすることが個々の業務の成果につながっているような気がしています。ところで、tommy先生「世相を斬る」のブログに、長らく静岡県、そして、全国の高校競技かるたを牽引されてきたある先生のごことが以下のように書かれていました。

静岡県かるた王国時代を代表する名監督が今年定年を迎える。現在某 S 岡東高校に勤務する、T 先生だ。T 先生は、大井川高校に赴任して、何の土壌のなかった土地に競技かるた部を創世し、瞬間に日本一になった。合計3回の全国制覇を成し遂げている。某 S 岡東高校の時代では、選手権には何度も出場するものの最高成績は準優勝で、残念ながら日本一にはなれなかった。ただし、某 S 岡東高校で、日本一になれなかったことで T 先生の名声に傷がつくことはまったくない。逆に、大井川高校時代を含めて、この競技かるたの指導者を30年間以上も続けてこられたことの方が驚きや恐怖や畏怖である。

あのね、競技かるたの大会って、朝の9:30から始まり夜の9:00まで行われることが普通なんです。だって、競技かるたそのものが1試合90分ほどかかるのです。そして、この競技かるたは普通トーナメント戦で行われる一つの大会で12時間もかかるのです。そして、競技会といっても静岡県だけで行われるものではありませんから、新幹線を駆使して、東京から京都まで、大会を求めて全国を行脚するのです。

この過酷な監督業を30年以上もやり続けたことが偉業である。そして、彼はこのかるた部指導にすべてを賭けた。そして、多くの同僚に愛され、多くの生徒に愛され続けた。おそらく T 先生を排除し嫌悪した人間はこの世にいない。加えて、彼は教科指導や学校業務にも一切、手を抜かなくなった。世界史の指導力にも定評がある。まるで、「かるたの指導を続けるためには、他のことも何でもやる」という高校の指導者の鏡でもある。「〇〇の指導が大変だから、その他を軽くしてほしい」などとほざいている普通の教師に見習わせてやりたい。

T 先生、ホントに今までお疲れ様でしたと、T 先生の下手褒めネタを書いたが、このブログは、毒舌ファンの皆様を讀者としているので、「毒」を少し。「多くの同僚に愛され…」とは、「多くの同僚に、食生活とか健康とかを心配されていた」という意味です。「多くの生徒に愛され続けた」とは、「愛されキャラであった」という意味で、一般に使われる「愛され」は全く当てはまりません。 M(_)_M

私は残念ながら T 先生とは面識はありませんが（たぶん、「トトロ」に似たあの方だろうと察しはついていますが）、tommy 先生のブログから T 先生の人柄が伺えます。本校競技かるた部は、3月14日（土）・15日（日）の青森県八戸市で行われる「第15回全国高校高校生かるたグランプリ」に中国地区代表として出場しますが、東海地区の代表は静岡県チームです。もしかしら、T 先生が静岡県チームの監督を務められる可能性があります。もしお会いすることができたら、いろいろと教えていただきたいと考えています。

「第5回保護者対象進路研修会」について

2月15日（土）に、河合塾 英語科講師 坂口 雅彦 様を講師としてお迎えし、「2021年度入試に向けて」をテーマに「第5回保護者対象進路研修会」を行いました。当日は、2年生の保護者を中心に約100名の参加がありました。

坂口先生には3年連続で講師を務めていただいておりますが、今回は、まずは、大学入学共通テストにおける英語の動向の内容について触れていただき、続いて、受験生を抱える保護者の役割についてご自身の経験をもとにお話ししていただきました。



講演後も、英語の学習の仕方や英語の民間試験の受験の是非などについて質問が相次ぎました。今年度の保護者対象進路研修会はこれをもって終了です。5回の研修会でのべ約700名の保護者の皆様方の参加がありました。ご協力、ありがとうございました。

「自分に合った大学の選び方」について

進路指導で大切なことは、生徒が目標としている「進路志望」が実現するよう支援していくことです。ただし、その前提として、生徒が選んだ「進路志望」に妥当性があることが求められます。

さて、生徒の中には、「自分に合った大学を選ぼう」という意識はかなり浸透しているような気がします。オープンキャンパスなどに参加する生徒は増えています。ただし、情報が多すぎて、かえってわからなくこともあるようです。また、入試が大きく変わろうとしています。今の受験生には大きな負荷がかかっているものと思われる。『ユニヴ・プレス Vol 20』に「自分に合った大学選び」について、以下のような記事がありました。

こうした負荷の影響からか、確実に受かる大学を望む受験生と保護者、もっと上を狙ってほしい進路指導側との間で意識の差が生まれやすくなっている、と打ち明ける進路指導担当者もいる。指定校推薦の中から偏差値の高い順に大学を選んだり「安牌」を選んだつもりが、結果ミスマッチによる中退や再受験に至るケースも多々聞かれるようになった。実際に大学入試センター試験のデータに目を向けても、別の大学を受験し直す「仮面浪人」が未だに多く存在することが見て取れるし、大学側からも中退率の上昇はよく聞かれる問題だ。

こうしたミスマッチをどのように防ぎ、かつ自分にあった大学を選ぶ「力」を育むことができるのだろうか。その答えの一つとして提言したいのが、大学の存在や意義そのものについて真剣に問いかけ、考えさせる機会を与えることだ。中学受験などで大学進学を意識する時期が早ければ早いほど、それが当たり前になりすぎて「そもそも大学とは」について考える機会が少なくなりがちだ。大学の成り立ちや役割、大学は何を行っているのかなど、大学の基礎について教える時間を大学選びの前に与えておきたい。ときには総合学習の時間に大学に関するレポートを書かせるなど、実際の進路指導とは別に大学研究の場を設けてみるのも一案ではないだろうか。大学で学ぶ意義について考えさせることは非常に大切で、きちんと考え抜いた生徒はたとえ第一志望に入れず、第二、第三志望の大学に入学しても学ぶことに意義を感じているのでつまづくことは少ない。ところが大学に合格することに重きを置いて受験勉強に励んだ場合、志望校に入れないと五月病になったり最悪の場合は休学や中退につながってしまうことも多い。

さらには、“考えさせる機会”とは別に“教育する機会”も必要だ。ウェブサイトやパンフレットなど実際に大学を知る上で最低限の情報を読み解き方だけでなく、就職率の読み方、オープンキャンパスではどんなポイントに注意して見るべきかなど、何となく個々の裁量に任せてしまいがちなこともリテラシーとして一度は学校で教えておきたい。なぜならば、これは受験生が各自でしっかりと情報の“一次ソース”にアクセスできるよう導く大切なスキームだからだ。デジタルネイティブで SNS 経由の情報に触れるのが当たり前となっている彼らの世代は、LINE やインスタグラム、ツイッターなどにあるソースのあやふやな情報や口コミに、我々が思う以上に高頻度で接している。こうした SNS での情報発信に積極的な大学もあるが、確実な一次ソースの見きわめ方、さらにオープンキャンパスなどで実際に大学の雰囲気に触れたり、時には大学の広報課に連絡を取るなど“リアルなモノ・コト・ヒト”に触れることの大切さを伝えておくべきではないだろうか。それが大学を知る上で最低限の「メディアリテラシー」であり、こうした知見を早期に広げておくことも、高校現場での教育の役割となりつつあるからだ。

そしてより実用的な候補を絞り込んで、選んでいく際に役立つのがランキング情報だ。受験情報誌やビジネス誌などさまざまな形で目にする機会の多い大学ランキング。これらのデータの扱い方は高校によって様々だが、「入学難易度」や「就職先」「資格取得」以外の情報をあまり活用できていないのではないだろうか。しかしこうした画一的な利用方法では、ランキングが「お墨付き」あるいは「リコメンド」といった性質として誤解されやすく、データ本来がもつ機能を十分に活用できていないと言え難い。

こういったランキングは何らかの実績に基づいた「序列」としてだけではなく、比較・検討するうえでの「素材」として、そして未知の大学を発見するための「ツール」と認識すれば、もっと活用の幅は広がっていく。たとえば学びたい学部や興味のある職業・資格についてランキングを元にオリジナルの比較表を作成してみる。あついは進学したい学部のある大学をエリア別にランキングして自分の学力から候補を絞り、地域ごとの生活費相場や仕送り平均額から4年間の暫定費用を算出することも可能だ。大学が公表している「教員一人あたりの学生費」などを大学別に割り出して“教育の質”に目を向けてみるのもいいだろう。また大学生協によっては「学生の一日の勉強時間」「大学滞在時間」「図書館利用状況」などの調査結果を公表しており、これらも大学の校風や学生の傾向を把握するいい判断材料となってくれる。ある大学に進学したら各地方からどんな割合で学生がきていて、どのくらい勉強して生活コストはどうなっているのか、レジャーは、留学は…と言った具合に自分が送るであろう4年間のストーリーを描き出すことができる。

一人ひとりの生徒が、データや情報を適切に扱いながら自身のストーリーを紡いでいけるような進路指導が求められているのかもしれない。

終わりに

先日、66回生の二人の卒業生が訪ねてきてくれました。二人は昨春に社会人となりました。高校時代の面影を残しながらも、仕事に真摯に取り組んでいることを聞くと何だか安心します。

(文責:進路指導部 池本 邦彦)